

複合外来語に由来する短縮語の形成メカニズムに関する研究

著者	文 昶允
内容記述	この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています。
発行年	2019
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2018
報告番号	12102甲第8901号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00156256

複合外来語に由来する短縮語の形成メカニズムに関する研究

人文社会科学部 文芸・言語専攻 日本語学領域

文 昶允

出版予定の書名：日本語における短縮外来語の形成とその仕組み
出版社等名：株式会社ひつじ書房（現時点では予定）
発行予定：2021年2月
博士論文の全文を公開できない理由：本人は、令和2年度日本学術振興会（科学研究費補助金（研究成果公開促進費））の助成金を申請し、博士論文を書籍として出版する予定である。2019年7月に出版社を訪ねて相談し、博士論文の出版作業を進めていくこととなった。博士論文のインターネットへの全文公表の差し止めを希望するという出版社の希望があったことから、2021年7月ごろまでの差し止めを申請する。

1. 研究背景と問題の所在

本研究は、実験的なアプローチにより、日本語の短縮語形成を制御する音韻的機構の諸相について明らかにすることを目的とする。

短縮語形成とは、基体となる語が長い場合、その一部を削除することによって、新しい語を形成する語形成である (Itô 1990; 窪菌 2002; Labrune 2002 など)。複合外来語に由来する短縮語は、一般に2つの構成素（前部要素と後部要素）の先頭からそれぞれ2モーラずつ切り取ることによって、合計4モーラからなる安定した構造をとる傾向がある (Itô 1990; 窪菌 2002)。「デジタル・カメラ」から「デジカメ」が作られるような過程がその好例である。ところが、前部要素の2モーラ目に長音が含まれていると、各構成素の初頭2モーラずつを順当に取るタイプ (1a, 保持形)に加え、第2モーラにある長音の代わりにその直後の自立モーラ（それ自身で音節を構成できるモーラ）を組み込むタイプ (1b, 補完形)が生じる。

- (1) a. シャープ・ペンシル → シャーペン（保持形）
b. パーソナル・コンピューター → パソコン（補完形）

(1a)と(1b)は、それぞれの第2モーラに長音を含むという共通性を持つが、(1a)「シャープ・ペンシル」は保持形に短縮される一方で、(1b)「パーソナル・コンピューター」は補完形に短縮される。本研究では、(1)の実例に見られるような、第2モーラに長音を含む複合語に由来する短縮形に異なるパターンが混在している点に注目する。

短縮現象は、日本語における二項フット (bimoraic foot) の役割や韻律最小性 (prosodic minimality) を主張するための証拠としてしばしば扱われてきた (Poser 1984, 1990; Itô 1990)。そのため、日本語の韻律と文法とのかかわりおよび韻律が果たす言語的役割の重要性を見出す上で、非常に重要な研究対象とされている。

しかしながら、短縮語形を予測する文法の解明の中で、これまでの研究には次のような問題がある。一つ目の問題は、従来の研究が短縮語におけるプロソディ的な側面に目を向けるあまり、分節音 (segment) が語形成メカニズムに与える影響については、あまり注目されてこなかったということである。例えば (1a) 「シャープ・ペンシル」は、通常「シャーペン」と略される。仮に、(1a) が補完形に略されると、短縮語形の形態素境界部に同一子音の連続 (*シャプペン /ʃapupen/) が生じてしまう。従って、(1a) が保持形に短縮されるのは、出来上がった語形における同音連続を回避した結果であると解釈できる。本研究では、同一あるいは類似した言語特徴が並んで出現することを回避する現象を OCP (Obligatory Contour Principle) 制約と見なす。その上で、実在語データベースの分析とともに無意味語を用いた実験の結果を提示し、OCP 制約が (1b) の補完形のような変則的タイプの出力にかかわる重要な要因の 1 つであることを明らかにする。

日本語の形態音韻現象には、連濁や複合語アクセント形成のように後部要素が語形成に影響するケースが多いが、本研究で取り上げた OCP 制約に影響される短縮現象は、前部要素と後部要素の両方が関与する現象である。本研究における成果は、今後日本語における形態音韻論・韻律形態論の研究に広く応用できる可能性を示したと言える。

二つ目の問題は、次の通りである。従来の研究において短縮語形成は、単に韻律的秩序を満たす文法現象のひとつとして扱われてきたが、最終的な短縮語形の選択には如何なる動機が働くのかについては、さほど注目されてこなかった。勿論、これは短縮語形成が韻律的秩序に従う音韻現象であるという事実を根底から疑うという意味ではない。なぜなら、多くの理論研究が積み上げられてきた成果があるからこそ、出力される語形に対して理論的に妥当な予測ができるためである。しかし、予測される短縮語形は、一貫してひとつであるとは限らない。音韻制約を満たす範囲であれば、予測される短縮語形にはバリエーションが存在するケースがある。例えば、「メール・アドレス」の場合、「メルアド」「メアド」など複数の語形が出力され得る。これらの語形は、ひとまず日本語の音韻制約によって絞られる。その上で、短縮語使用者の選好傾向が関与することにより、最終的な語形が決められると考える。

本研究では、語形成実験を通じて短縮語使用者の短縮方略を世代ごとに比較し、短縮語形成における新たな動態を記述する。従来、日本語における動態研究は、アクセントの変異を対象として盛んに進められてきたものの (相澤 1992; 田中 2008; 田中 2010)、語形成過程における動態研究は極めて乏しい状況にある。従って、本研究を通じて捉えられる言語動態は、今後の言語研究における新たな知見の開拓につながると考えられる。その上で、世代間における短縮方略の違いを変化の兆しとして見なす点は、本研究における大きな意義であると言える。

2. 各章の内容

第 1 章「序論」では、本研究の考察対象および研究目的を述べ、全体の構成と議論を概観する。

第 2 章「先行研究と本研究の位置づけ」では、韻律形態論 (prosodic morphology) の枠組みを用いて分析している先行研究を概観し、これまで注目を集めてきた主たる問題および積み重ねら

れている研究成果を示す。その上で、これまで短縮語の研究に関する注目が、二項フット (bi-moraic foot) および音節構造 (syllable structure) が果たす役割とその重要性に偏りがちであったことを指摘しつつ、短縮語の出力形を決定する新たな要因に着目する必要があるという点について論じる。

第3章「前部要素に長音を含む複合外来語と短縮語形」では、本研究が複合外来語の前部要素に長音を含む語とその短縮語形に注目する理由について述べる。その理由は、短縮語の形成方法と関連している。(2) は、単純外来語由来の短縮語に加え、複合外来語由来の短縮語の例を示したものである。

(2) a. 単純外来語由来の短縮語

イラストレーション → イラスト

b. 複合外来語由来の短縮語

シャープ・ペンシル → シャーペン,
*シャプペン (OCP 制約に違反)
pu-pe

OCP 制約は、基体の一部を結合する過程を伴う場合に働く。そのため、(2a) 単純語の場合は、基体の左端からどの範囲までを切り取るかで語形成が済み、OCP 制約はかかわらない。しかしながら、(2b) 複合語の場合は、各構成素から切り取った語形の結合という操作が求められるため、OCP 制約による出力形の制御があり得る (*シャプペン)。従って、短縮語形成における OCP 制約の影響について見るには、複合語に由来する短縮語が考察対象としてより適している。

しかしながら、複合語由来の短縮語は、特定の語種を基体として生成されるわけではない。そうした中で考察範囲を外来語の基体に限定するのは、次のような理由によるものである。各語彙層における特殊モーラの出現頻度について調査した先行研究 (松崎 1994: 78) によれば、長音は漢語に最も多く現れ、和語には極めて少ないという。長音の出現頻度について松崎 (1994) が示しているデータによると、「漢語 > 外来語 > 和語」の順に多いとされている。このデータに基づくと、長音を含む複合語を分析するには、その構成素が漢語や外来語である方が適していると言える。しかし、長音の出現頻度が最も高いという理由で、漢語を本研究の考察範囲に入れてしまうと、(3) のような例が問題となってくる。

- (3) a. ワーキング・ホリデー → ワーホリ (保持形)
a'. パーソナル・コンピューター → パソコン (補完形)
b. 合同 (ゴードー)・コンパ → ゴーコン (保持形)
*ゴドコン (補完形)

(3) は、いずれも前部要素の第2モーラが長音であるという点では共通するが、(3a) (3a') は

前部要素と後部要素がともに外来語である一方で、(3b)は前部要素のみが漢語である。(3a) (3a')のように基体が外来語であると、構成素の語頭から順当に2モーラを取る保持形(例:ワーホリ)に加え、(3a')のように前部要素の長音を取る代わりに、直後の自立モーラを組み込む補完形(例:パソコン)の2つのパターンが出力できる。それに対して、(3b)のように基体が漢語である場合、短縮の切れ目が漢字表記(文字)と一致するため(窪菌 1995)、(3b)における前部要素「合同」からは、「合」という1文字が短縮語形に残る。従って、第2モーラにある長音を短縮語に組み込まないタイプ、すなわち補完形として短縮されることは起こりにくく(*ゴドコン)、短縮パターンがある程度予測できてしまう。以上のことから、本研究では、基体に漢語が混在する例を除き、外来語のみで形成されている複合語を考察対象とする。

本研究は、特殊モーラを含む語から作られる「パソコン」、「メアド」のような変則的タイプの語形(補完形、脱落形)に注目するものであるが、これらの語形は、基体の重音節 CVX において、自立モーラ CV と特殊モーラ X が切り離されることによって形成される。特殊モーラが自立モーラから分離されやすいか否かは、特殊モーラが音節のまとまりとしてどの程度安定しているかによって異なる。

特殊モーラの安定度とは、「音連続として、あるいは音節を構成するまとまりとして、どの程度安定したものであるかという尺度」(窪菌 1999: 250)であり、「撥音 (N) > 二重母音 (J) > 長音 (R) > 促音 (Q)」の順で高い階層を成す。特殊モーラの安定度における尺度は、各特殊モーラが音節内で対応する分節を持つか否かに基づいている。撥音 (N) と二重母音 (J) は、いずれも重音節内に固有の分節を持つという特徴がある。これに対して、長音 (R) と促音 (Q) は、「独自の分節を持たず、隣接する母音ないしは子音からのいわば『借り物』の分節によって」(那須 2005: 15) モーラの節点が満たされるということから分節構造上の親近性を有する。

こうした特殊モーラの安定度は、複合外来語由来の短縮語における変則的タイプの生起にも影響する。【表 1】は、複合語由来の短縮語データベースを基に、前部要素の第2モーラに特殊モーラを含む実例の数とその短縮語形(保持形、補完形、脱落形)を示したものである。

【表 1】特殊モーラを含む語の短縮語形(前部要素の第2モーラ)

	実例数	保持形	補完形	脱落形	例
a. 撥音 (N)	144 語	144 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	モンスト
b. 二重母音 (J)	83 語	74 (89.2%)	6 (7.2%)	3 (4.6%)	アイマス
c. 長音 (R)	123 語	78 (63.4%)	42 (34.2%)	3 (2.4%)	パソコン
d. 促音 (Q)	26 語	11 (42.3%)	11 (42.3%)	4 (15.4%)	ラキスト

【表 1】からうかがえるように、音節内での安定度が最も高いとされる (a) 撥音の場合、前部要素では例外なく保持される(例: モンスター・ストライク → モンスト)。安定度が高いグループに属する (b) 二重母音の場合にも、前部要素では約 89% で高い保持率を示している(例: アイドル・マスター → アイマス)。また、(a) 撥音と (b) 二重母音における補完率や脱落率は、

いずれも 10%未満でかなり低い。一方で、安定度の低いグループに属する (c) 長音 (例：パーソナル・コンピューター → パソコン) と (d) 促音 (例：ラッキー・ストライク → ラキスト) の場合は、(a) 撥音と (b) 二重母音に比べて、補完形の割合は高くなっている (長音は約 34%、促音は約 42%)。

本研究では、後部要素ではなく、前部要素の 2 モーラ目にある長音に注目する。後部要素の第 2 モーラにある長音は、短縮されると語末という音環境に置かれることになる。長音が語末に置かれると、短母音化する傾向にある (例：スケート・ボード → スケボー ~ スケボ)。語末環境における長音が短母音化しやすいという傾向については、窪菌 (2000), Labrune (2002), 薛 (2012) による記述的研究に加え、音声学的な知見 (助川・前川・上原 1999) に基づいた説明が与えられている。従って、本研究では、短母音化の可能性が高い後部要素の長音よりも、前部要素の長音を対象とする方がより適していると考えられる。

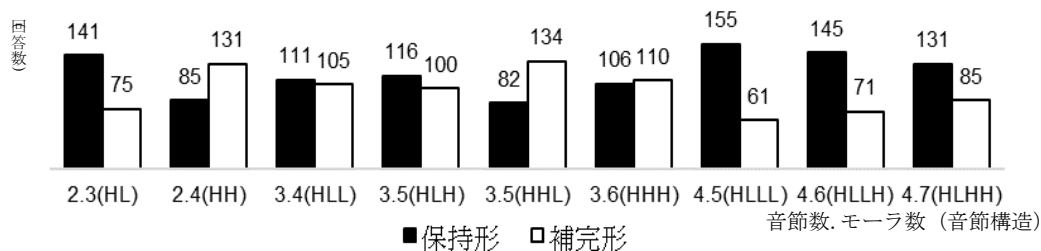
第 4 章「複合外来語由来の短縮語に影響する音節構造」では、従来の研究を踏まえ、韻律形態論を枠組みとし、基体における音節構造が短縮語形成に与える影響について論じる。手法としては、既に定着した実在語の分析に加え、語形成実験を行う。【表 2】は、実験語のうち 1 例を示したものである。

【表 2】語形成実験で設けた 3 つの音韻条件

	N1・N2	保持形	補完形
例	ムード・コンサート	ムーコン	ムドコン
音韻条件	①2σ ②3μ	③形態素境界部に同一子音の連続無し (d と k)	

語形成実験に用いた複合語は、前部要素と後部要素は有意味語であるが、出来上がった語形は実在しないものである。実験語の選択にあたっては、前部要素の①音節数、②モーラ数、③補完形の形態素境界部に同一子音が連続しない音配列の 3 つの音韻条件を設けた。たとえば、複合語の前部要素である「ムード」は、「2 音節 3 モーラ」の категорияに該当する。また、「ムード・コンサート」という実験語の短縮パターンとして補完形 (例：ムドコン) を設定する場合、複合される形態素境界部 (ムドコン) に同一子音が続かないようにコントロールした (この場合は、d と k)。実験は、Praat で実施した。「前部要素・後部要素」形式の無意味語をランダムに並べて提示し、パソコンのモニターに提示された 2 つの形式 (左側に保持形、右側に補完形) の中から、実験協力者に自然に感じられる方を選んでもらった。

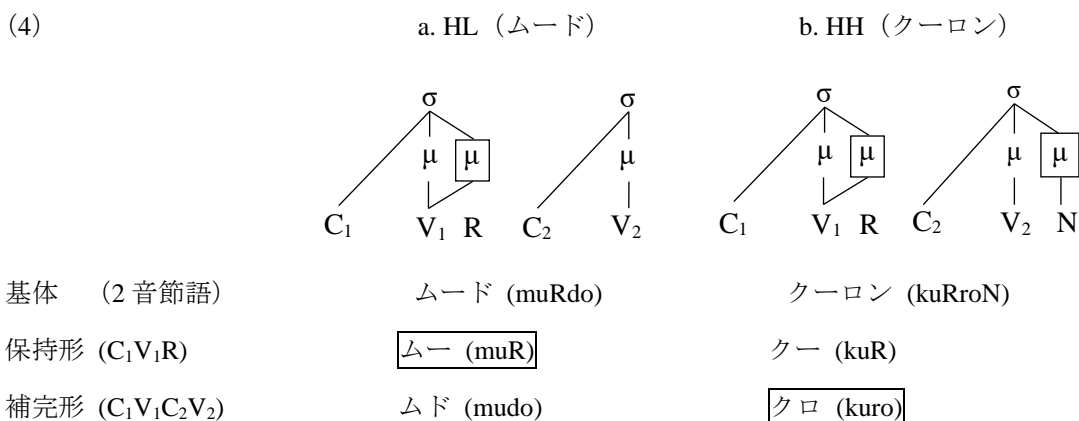
【図 1】は、前部要素の第 2 モーラに長音を含む 2 音節 3 モーラ語から 4 音節 7 モーラ語までの 9 個の category に対する、保持形と補完形の回答数を表している。縦軸は各 category 別の回答数を、横軸は音節構造 (数字は「音節数・モーラ数」の順。H は heavy syllable (重音節)、L は light syllable (軽音節)) を表す。また、黒棒は保持形の回答数を、白棒は補完形の回答数を表す。実験協力者 72 人がそれぞれの category ごとに 3 問ずつ答えたため、回答数は各々の category で合計 216 ずつとなる。



【図 1】 語形成実験の結果（補完形の形態素境界部に同一子音の連続無し）

語形成実験から明らかになったことは、次の 2 つにまとめられる。1 つ目は、全体的な傾向として、保持形を選択した回答数が多い（保持形の回答数 1072，補完形の回答数 872）ことである。2 つ目は、各音節の初頭 2 音節の音節構造によって、選択されやすい短縮パターンが異なることである。たとえば、前部要素の初頭 2 音節が HL から始まる場合は保持形として短縮されやすく（例：ムード・コンサート → ムーコン）、HH から始まる場合は補完形として短縮されやすい（例：クーロン・コンサート → クロコン）傾向が捉えられる。

初頭 2 音節の音節構造の違いによって、短縮パターンの現れ方が最もはっきりと異なるのは、前部要素が 2 音節語のときである。なぜ短縮パターンの現れ方が異なるのかについては、以下のような理由が考えられる。(4) は、前部要素がそれぞれ (4a) HL と (4b) HH である場合の基体の音節構造とその短縮語形（保持形，補完形）を示したものである。なお、(4) における大文字 R, N は特殊モーラである長音，および撥音をそれぞれ意味し，小文字は基体における分節要素を意味する。



(4) の枠は、それぞれの音節構造において多く選ばれた語形である。(4) に示した音節構造を見ると、(4a) 「ムード」に対する保持形「ムー」は、長音を含む第 1 音節 (C₁V₁R) のみが短縮語形に残されることがうかがえる。それに比べて (4a) 「ムード」に対する補完形「ムド」は、基体の分節要素 (C₁V₁C₂V₂) 全てがそのまま継承される。前部要素の音節構造が HL である (4a) 「ムード」が補完形「ムド」にされた場合、短縮される前と後では分節要素の数は変わらない

め、分節要素の観点からみると、補完形「ムド」は短縮が起きたとは言えない。

一方で、(4b)「クーロン」(HH)は、第2音節の重音節内に、それ自身のモーラに対応する分節を持つ撥音が含まれている。そのため、補完形「クロ」として短縮されても、基体の分節要素を全て切り取ったことにはならない。短縮現象には「元の単語が容易に復元できること」(窪菌2002:95)が求められるが、この条件を満たすためには、短縮される前の語形の復元に必要な情報(すなわち、分節要素)を多く残す必要がある。今回の実験の結果から、(4b)「クーロン」(HH)において補完形を自然と判断した回答が多かったのは、基体の復元を志向するという動機が優先的に働いた結果であると推察できる。

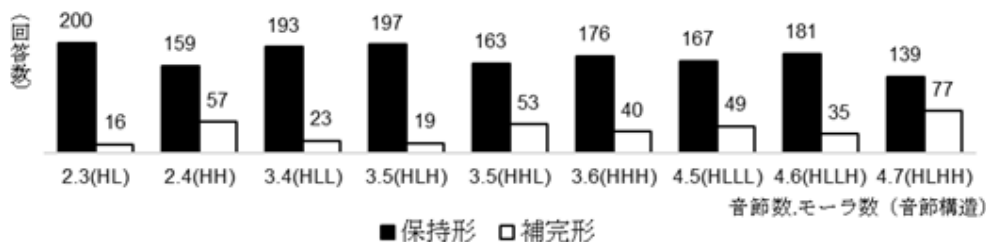
第5章「複合外来語由来の短縮語形成とOCP制約」では、OCP制約が短縮語形成に与える影響について論じる。手法としては、分節音の配列をコントロールした語形成実験を行った。まず、実験における条件は、補完形に同一子音の連鎖があるということだけが【表2】と異なっている。【表3】は、実際の語形成実験に用いられた実験語のうち、1例を取り上げて示したものである。

【表3】 語形成実験で設けた3つの音韻条件

	N1・N2	保持形	補完形
例	ジープ・パレード	ジープレ	ジプパレ
音韻条件	①2σ ②3μ	③形態素境界部に同一子音の連続あり (pp)	

たとえば、複合語の前部要素である「ジープ」は、「2音節3モーラ」のカテゴリーに属する。また、「ジープ・パレード」という実験語の短縮パターンとして補完形を想定する場合、「ジプパレ」のように、複合される形態素境界部に同一子音が続くように(ここでは‘pp’)コントロールした。補完形は、同一音の連続箇所の数によって、2つのタイプに分けられる。1つは、子音層のみが同一である場合(例:パセステ)であり(14個)、もう1つは、子音層に加え母音層においても同一音が連続する場合(例:ルスステ)である(13個)。

【図2】は、形態素境界部に同一音が連続する場合における保持形と補完形の回答数をそれぞれ示している。グラフは、前部要素の第2モーラに長音を含む2音節3モーラから4音節7モーラまでの9つのカテゴリーにおける保持形と補完形それぞれの回答数を表している。黒棒は保持形の回答数を、白棒は補完形の回答数を表す。実験協力者の72人がそれぞれのカテゴリーごとに3問ずつ答えたので、回答数はカテゴリーごとに計216ずつとなる。



【図2】 語形成実験の結果 (補完形の形態素境界部に同一子音の連続あり)

【図 2】からうかがえるように、補完形の形態素境界部において同一子音が連続する場合は、前部要素の音節数やモーラ数に関係なく、補完形として現れにくい。実際、カテゴリ別の回答数を見ても、保持形の回答率は 64.4%（保持形の回答数 / 合計: 139 / 216）から 92.6%（保持形の回答数 / 合計: 200 / 216）にわたる数値を示しており、いずれも補完形より保持形の方を自然と判断した回答が多い。

実験語で設定した補完形は、同一音の連続が 1 ヶ所（子音層）で生じるタイプと、2 ヶ所（子音層と母音層）で生じるタイプの 2 つに分けられる。それぞれの短縮語形における回答数を見ると、同一音の連続が 1 ヶ所で生じる場合において、保持形を自然だと判断した回答数は 754 であり、補完形を自然だと判断した回答数は 254 となっている。一方で、同一音の連続が 2 ヶ所で生じる場合においては、保持形を自然だと判断した回答数は 821 であり、補完形を自然だと判断した回答数は 115 となっている。子音層と母音層において、OCP 違反の箇所と短縮語形の回答数との関係を調べるために行ったカイ二乗検定の結果からも、これらの差は統計的に有意であるということが明らかになった ($\chi^2(1) = 51.78, p < .01$)。

このことから、素性層において OCP 制約に違反する箇所が多いほど補完形が避けられやすいことが分かる。こうした同一音の連続箇所の多寡による OCP 制約の度合いについては、Kawahara and Sano (2016) が行った実験の結果によっても示されている。Kawahara and Sano (2016) の実験は、OCP 違反の回避と連濁の生起との関係について検証しているものである。実験の結果を見ると、複合語における形態素境界部に同一音節 (CV) の連鎖が形成される場合とそうでない場合とで、連濁率の差に統計的有意差が示されている。具体的には、「/iga/ + /kaniro/」に比べて「/iga/ + /keniro/」の方が連濁しやすいという結果が得られている。なぜなら、「/iga/ + /kaniro/」に対する連濁形は、複合語における形態素境界部に同一の CV（子音と母音）が連続する（/igaganiro/）一方で、「/iga/ + /keniro/」においては、同一の C（子音）のみが連続する（/igageniro/）ためである。この結果から、形態素境界部に連続する同一モーラの数、語形成過程に影響する要因の 1 つであることが示唆される。

第 6 章「複合外来語由来の短縮語形成過程に見られる世代差」では、短縮語の形成過程に見られる世代差の実態について、語形成実験を通じて分析した。

短縮語の韻律的特徴を踏まえつつ、短縮現象を若者言葉として捉えている先行研究には、日比谷 (1998) と森 (2002) が取り上げられる。これらの先行研究には、次のような問題がある。第一に、基体となる構成素の語種について区別をしていない点が挙げられる。基体に漢語が混在しているデータを外来語と並行的に分析することは望ましくない。なぜなら、漢語の場合、短縮の切れ目が漢字表記（文字）と一致する（窪菌 1995）ためである。第二に、調査対象が限定されており、短縮語を使用する話者の世代差に関しては不明な点が残ることが指摘できる。日比谷 (1998) および森 (2002) における調査は、1990 年代から 2000 年にかけての大学生を調査対象とすることで、当時の若者が用いる短縮語形の状況を観察している。しかしながら、日比谷 (1998) と森 (2002) においては、短縮語の形成過程にみられる世代差の実態が不明瞭である。とりわけ

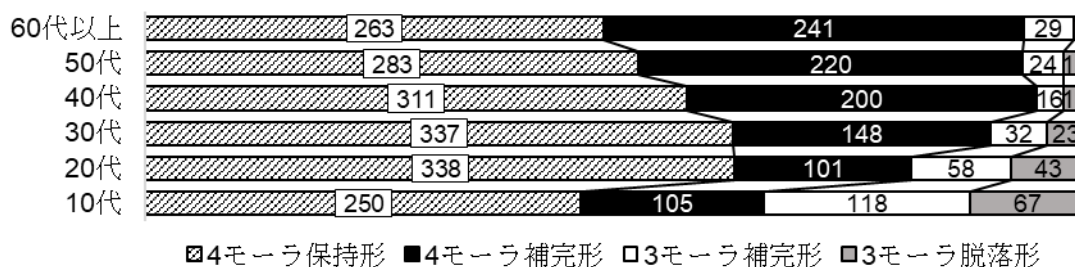
3モーラ短縮形は、これらの先行研究のデータにおいて例外的なタイプとして分類されているものの、調査対象が当時の若年齢層に限定されていたため、他の年齢層での実態についても調査を行う必要がある。

語形成実験では、基体を構成するそれぞれの構成素（前部要素，後部要素）は意味を持つ一方で、それらを組み合わせることによって意味を持たなくなる無意味語（例：ヨーグルト・マカロニ）を用いた。そして、各無意味語については、【表4】に挙げるように、4つの語形を選択肢として用意した。これらの実験語（ダミーを含む）をランダムに並び替え、質問紙（2枚）を作成した。実験協力者は日本語を母語とする話者90人で、10代から60代以上の各年齢層につき15人ずつである。

【表4】語形成実験で設けた実験語と音韻条件

	保持形	補完形	脱落形
例	(a) ヨーマカ	(b) ヨ <u>グ</u> マカ (c) ヨ <u>グ</u> マ	(d) ヨ <u>マ</u> カ
音韻条件	形態素境界部に同一子音の連続無し（下線）		

【図4】は、各世代における回答数を示している。グラフは左から順に4モーラ保持形、4モーラ補完形、3モーラ補完形、そして3モーラ脱落形の回答数を表す。世代別に15人が36問ずつ答えたため、回答数は合計540ずつとなる。

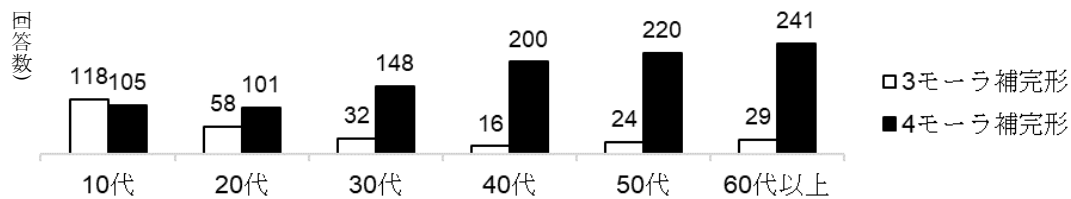


【図4】各世代における語形成実験の結果

実験の結果、複合外来語由来の短縮語形成方略には、世代により差があることが明らかになった。具体的には、おおむね若年齢層になるほど選択される短縮語形のバリエーションが増えるのに対し、中・高年齢層になるほどバリエーションが少なくなっていることが分かる。【図4】における特徴は、次の2点が挙げられる。その1つは、いずれの世代においても4モーラ短縮形を愛好する傾向がみられることである。もう1つは、10代における3モーラ短縮形の回答数が、他の年齢層に比べかなり目立つということである。具体的には、60代以上における3モーラ短縮形の回答数は36(6.7%)にとどまっている一方で、10代における3モーラ短縮形の回答数は185(34.3%)でかなり高い。10代と60代以上の年齢層とで、モーラ数が異なる短縮語形に対する回答数に差があるかを調べるためにカイ二乗検定を行った結果からも、有意な差が認められた

$\chi^2(1) = 124.61, p < .01$ 。

短縮形のモーラ数による差を検討するためには、3モーラ補完形と4モーラ補完形の回答数がどう異なるのかを比較する必要がある。【図5】は、それぞれ10代から60代以上における補完形の回答数を示したものである。グラフの白い棒は3モーラ補完形の回答数（例：ヨーグルト・マカロニ → ヨグマ）を、黒い棒は4モーラ補完形（例：ヨーグルト・マカロニ → ヨグマカ）の回答数を表す。



【図5】各年齢層における補完形の回答数

【図5】の結果から、4モーラ補完形の回答は、中・高年齢層において偏っており、一方で3モーラ補完形の回答は、若年齢層に偏っているという顕著な傾向がうかがえる。具体的には、60代以上における4モーラ補完形の回答数は241(44.6%)である一方で、10代における4モーラ補完形の回答数は105(19.4%)にとどまっている。それに対して10代における3モーラ補完形の回答数は118(21.9%)である一方で、60代以上における3モーラ補完形の回答数は29(5.4%)でかなり低い。つまり、4モーラ補完形の回答数は、年齢層が上がるに連れ増加する傾向にある一方で、3モーラ補完形の回答数は下がる傾向にあるということである。実際に10代と60代以上の年齢層とで、補完形の回答数に差があるかを調べるために、カイ二乗検定を行った。その結果、統計的有意差が認められた($\chi^2(1) = 101.80, p < .01$)。

ここで、短縮語形成に見られる世代差をどのように捉えるか、また、言語使用者の選好志向という要因はどのように位置づけられるかについて論じる必要がある。本章における実験では、二項フット (bimoraic foot) の構造 (例：ヨーグルト・マカロニ → ヨグマカ) を持つ語形に加え、「F+L」(3モーラ補完形, 例：ヨグマ) および「L+F」(3モーラ脱落形, 例：ヨマカ) 構造を持つ語形が選択肢として設けられている。【図4】の各語形における回答数の内訳を見ると、10代を除いて、年齢層を問わず3モーラ脱落形 (L+F) を自然と判断した回答は最も少ないことが見受けられる。この結果には、3モーラ脱落形 (L+F) が韻律的に有標であり (Itô 1990; Itô, Kitagawa & Mester 1996; 窪菌 2005)、かつ短縮語形成に音節構造の有標性が関与していることが示唆されている。

しかし、一方で3モーラ脱落形 (L+F) が韻律的に有標であるにもかかわらず、10代の若い世代からは一定程度選好されている。こうした短縮語形の世代差には、言語使用者が短縮語に対して持つ態度が反映されており、かつ言語に対する話者の態度は、音韻的制約のみによって決められるものではない。このような現状には、10代の若い世代は既存の世代 (中・高年齢層) が使用していた語形をそのまま引き継ぐのではなく、語形を変化させることで規範的に使われた語

形を回避しようとする意識が反映されている。これは、短縮語が「規範からの自由と遊びに特徴を持つことば」（米川 1996: 14）として位置づけられることを示唆している。

短縮語形の志向における世代差は、歴史的な変化によるものではない。歴史的な変化を探究するには、文献（文字）として残されている資料を手がかりとして、既に変化が完了した言語の現在の姿と過去の姿を比較し、かつその変化の引き金となった原因を明らかにする作業が必要となる。しかしながら、世代間における短縮語形の志向性の変化は、歴史的変化であると言えるほどの長い時間軸の上で観察できるものではなく、共時代における変異形として生起するものである。

最後に、上述した議論を踏まえ、短縮語における今後の動態について簡略に展望する。具体的には、3モーラ短縮形の志向性は、若い世代が中・高年齢層になってもそのまま維持されるかどうかという問題についてである。仮に、3モーラ短縮形の志向性が維持される場合は、今後3モーラ短縮形がデフォルト形になることを意味し、それは、言語変化の兆候としてみなされる。一方で、3モーラ短縮形の志向性が維持されない場合は、一体何を意味するのであろうか。1つの考え方として、3モーラ短縮形が集団語として位置づけられていた可能性が挙げられる。現在の10代の話者は、やがて社会へ進出すると新しい社会集団に属することになる。ゆえに、集団語として使用していた3モーラ短縮形を使用する機会が、10代の時に比べて少なくなると考えられる。現状では、今後の世代におけるデータが得られないため今後の様子について断言することは難しい。しかしながら、今後の若い世代が如何なる短縮語形を好むようになるかについては、引き続き追究していく価値のある課題であると考えられる。

本研究の成果は、次のようにまとめられる。第一に、短縮語形成の現状を実証的に検証した研究が乏しい中で、実験に基づいて考察を深めた点が挙げられる。第二に、日本語の短縮語の形成過程におけるOCP制約の影響を、実験を通して検証したという点で、理論研究に貢献できると考えられる。第三に、短縮語の形成過程に見られる世代差の実態とその仕組みを記述した点が挙げられる。